

Title	女性起業家輩出のプログラムその2 : 宮城学院女子大学2年目の取り組み
Author(s)	渡部, 順一
Citation	年次学術大会講演要旨集, 33: 238-241
Issue Date	2018-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/15592
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

女性起業家輩出のプログラムその2 ～宮城学院女子大学2年目の取り組み～

○渡部順一（宮城学院女子大学）

1. 初めに

1.1. 背景

宮城学院女子大学では、起業一巡の流れを理論・実践の両面から学習する「女性起業家輩出のプログラム」を始めた。まず、アイデアの醸成として、商品を企画立案する。次に、アイデアの実践として、ビジネスプランを基に（模擬的に）投資を受け株式会社を設立、さらに、実際に商品を開発、製造し、販売する。その後清算を行い、配当するといった流れの実証的な授業となっている。

2017年度受講生は7人であり、2グループ（4人と3人）に分かれて、東京証券取引所、仙台市の支援を受けて、宮城学院¹⁾のノベルティグッズ²⁾を題材として、「ブックカバー」と「タンブラー」の起業化に取り組んだ。この7名は本年度も継続して受講しており、2018年度も2グループ（前年度より組み替え）に分かれて、東北工芸製作所³⁾の支援、並びに、本学「プロジェクト型自主活動⁴⁾」の援助を受けて、宮城県の伝統工芸「玉虫塗⁵⁾」を題材として、「手鏡」と「しおり」の事業化に取り組んでいる。

2018年度新たに受講する学生は7名おり、こちらの学生も2グループ（4人と3人）に分かれて、2017年度の東京証券取引所、仙台市の支援を受けた宮城学院のノベルティグッズを題材としたプログラムを継続して取り組むこととした。2018年度は「トートバック」と「ふせん」の起業化を目指している。

1.2. 目的

宮城学院女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科（以下「現代ビジネス学科」）の中では、高等教育機関の場で将来ビジネスの世界で身を立てようと希望する女子学生たちに「起業」について、系統立てた授業を試みている。大学発ベンチャーが輩出しているというものの、その多くは、医歯薬理工系の分野となっている。本学は、人口が100万人を超える宮城県仙台市に立地することから、高い技術を持った企業の創業だけではなく、社会的（生活）イノベーションとしての、都市生活をより豊かにする、あるいは、より便利にする生活に密着したサービス型の産業の創業を目指している。

渡部・薄葉[1]では、その一年目にあたる2017年度の取り組みを紹介しており、「高等教育機関ではこうした創業を超えた、都市生活をより豊かにする、あるいは、より便利にする生活に密着したサービス型の産業の創出を目指し、より発展性の高い、女性起業家輩出のプログラムが求められる⁶⁾と課題

1) 学校法人宮城学院。2018年9月16日最終閲覧。http://www.mgu.ac.jp/home/

1886年創立。女子大学（含む、大学院）、中学校高等学校、及び、大学付属日程こども園の教育機関を有する。2017年5月1日現在、3,633名が学んでいる。

2) Novelty Item。本稿では、「宮城学院の名称等を入れて記念として、あるいは、所属意識を持たせることを意図として、販売する商品」の意味で用いている。

3) 有限会社東北工芸製作所。2018年9月16日最終閲覧。http://www.t-kogei.co.jp/

1933年の会社設立には、国立工芸指導所指導所（以下「指導所」）と東北帝国大学（現、東北大学）金属材料研究所が支援を行っている。

4) 宮城学院女子大学。2018年9月16日最終閲覧。

http://www.mgu.ac.jp/main/campus/lac/project_type/index.html

5) 宮城県庁。2018年9月16日最終閲覧。

https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/shinsan/16tamamusu.html

玉虫塗は、1932年に「指導所」で発明されて特許を得たのが始まりで、東北工芸製作所が実施権を得て製作している。その製法の特徴は、漆器本来の本堅地下地をほどこした後に、全面銀粉を蒔き、最後に特殊な玉虫漆で仕上げるところにある。1985年、宮城県知事指定伝統的工芸品に指定されている。

6) 渡部・薄葉（2017）。842頁。

を挙げている。また、「実際に、女性起業家輩出のプログラムの受講している、学生のコメントをフィードバックすることが必要である」⁷⁾との指摘も受けている。

本稿では、これらの課題、あるいは、指摘を踏まえて、社会的イノベーションとしての起業の観点から、本学における「女性起業家輩出のプログラム」の基盤となる理論構築とそれに基づく実践の改善・改良の試みについて、報告するものである。

2. 先行研究、先行する起業家体験プログラム、及び、本プログラムの視点

2.1. 昨年度における先行研究、並びに、昨年度の起業家体験プログラムの意図

渡部・薄葉[1]では、先行研究として、組織のプログラムはAdams[2]とKelly[3]を、起業家輩出は松田[4]、松田・大江[5]、あるいは、Bygrave[6]を参照している。また、先行する起業家体験プログラムとして、東京証券取引所の試みを参照している。

その上で、2017年度は、起業家の理論を学習するというよりは、実際に、自らのアイデアを商品化し、販売するという実践的な取り組みを試行的に行っている。

2.2. 社会的イノベーション

野城[7] (246-247 頁) では、社会的イノベーションについて、「社会的なニーズや問題への対応を主眼に、新しい種類の解決策を創造・適用することによって、社会的価値を増進し、社会の現状を刷新するような変革を生み出すこと」として定義して、「経済的価値とは一線を画する」としている。

2.3 本プログラムの視点

本学における「女性起業家輩出のプログラム」は、社会的（生活）イノベーションとしての、都市生活をより豊かにする、あるいは、より便利にする生活に密着したサービス型の産業の創業を目指していることから、昨年度における先行研究、並びに、昨年度の起業家体験プログラムを踏まえて、野瀬[7] (247 頁) で論じられている「経済的価値とは一線を画する」とした視点に着目して、プログラム実施を改善・改良している。

具体的には、2017年度のプログラムを踏襲しつつも、「宮城学院のノベルティグッズ」を題材としたグループには、そのノベルティグッズを購入する人にとっては、機能性よりも「宮城学院の一員」であることを示すマークやロゴが重要であり、購入によって「宮城学院へ貢献」していること意味することなど、社会的イノベーションであることを充分意識させるようにする。また、「伝統工芸」を題材としたグループには、伝統的工芸品に新しいデザインを取り入れることによって、機能としては変わらないものの、それを購入することによって新たな美的価値を加味していくことを意識させるようにする。

3. 女性起業家輩出のプログラム

3.1. 「宮城学院のノベルティグッズ」を題材とした女性起業家輩出のプログラム

本プログラムは、宮城学院同窓生・在校生を「ターゲットセグメント」と見立て、「アイデアの醸成」、「事業計画書作成」、「ビジネスプレゼンテーション」、「(疑似的) 投資」、「(疑似的) 会社設立 (定款作成・会計書類作成)」、「製品開発・商品作成」、「販売 (事業活動)」、及び「(疑似的) 株主総会」までの「起業一巡の流れ」の活動を行うものである。

3.2. 2017年度の活動と学生からの評価

2017年度は、東京証券取引所の起業体験プログラムの支援を受けて、仙台市、宮城学院同窓会、宮城学院生活協同組合、特許業務法人、仙台市産業振興事業団、日本公認会計士協会東北会、及び、宮城県司法書士会の協力により、「ブックカバー」と「タンブラー」の起業化に取り組んだ。特に、東京証券取引所、並びに、仙台市は、「(疑似的) 投資」の際に事業計画書とプレゼンテーションを受けて投資金額を決定⁸⁾すること、「(疑似的) 株主総会」に出席して事業報告への質疑応答を行い (疑似的) 配当⁹⁾を受ける投資家の役割を果たした。なお、仙台市が主催している「まちなかマルシェ」¹⁰⁾の活動に参画

⁷⁾ 研究・イノベーション学会第32回年次学術大会 (2017)、「2I18」における討論より。

⁸⁾ 「ブックカバー」に4万円、「タンブラー」に6万円の (疑似的) 投資を決定した。

⁹⁾ 実際には、商品が売れず、大幅赤字となり、(疑似的) 配当は発生しなかった。

¹⁰⁾ <https://machi-kuru.com/events/marche>. 2018年9月18日最終閲覧。

し、中心商店街において、「販売（事業活動）」を行っている。

「ブックカバー」のグループでは、「自ら事業を起こすことの大変さ、事業結果に対する責任、様々な専門家の方々からの講話、ビジネスマナーなど学ぶことが本当にたくさんあった」、また、「初めて自ら企画から決算までを行ったが、計画通りに行かないことがたくさんあった。特に、販売費及び一般管理費が計画よりもかさんでしまったため、利益が伸びなかった。買ってくれる人数の設定の段階で、もう少し深く構想を練るべきだった」などの感想が寄せられている。

タンブラーのグループからは、「タンブラーをたくさん売ることではできず、赤字になってしまったが、製品を作り、販売する経験ができて勉強になり、大変でしたがとても楽しかった。メンバーと協力し、普段の授業では学ぶことのできないことを学ぶことができた」などの感想が寄せられている。

3.3. 2018 年度の活動

2018 年度新たに受講する学生 7 名は、2 グループ（4 人と 3 人）に分かれて、「トートバック」と「ふせん」の起業化に取り組んでいる。7 月末時点で、宮城学院同窓会、並びに、宮城学院生活協同組合のノベルティグッズの調査を行い、「アイデアの醸成」を行っている。また、そのアイデアについて、パテントコンテスト¹¹⁾の発明提出書に準拠したアイデアノートとして文書化している。そして、そのアイデアノートにより仙台市産業事業団が運営している仙台市起業支援センター「アシ☆スタ」にて、それぞれのグループごとに「起業相談」を受けている。

4. 女性起業家輩出のプログラム

4.1. 「宮城県の伝統工芸」を題材とした女性起業家輩出のプログラム

2017 年度受講した 7 名は、2018 年度も「女性起業家輩出のプログラム」に取り組むこととなった。基本的には、「起業一巡の流れ」に沿ったプログラムとなるが、「ターゲットセグメント」、並びに、「アイデアの醸成」について、自ら主体的に構想を練らせたところ、宮城学院同窓生・在校生に加えて一般の消費者にも訴求するもので、宮城県の伝統工芸を活かした「製品開発・商品作成」が出来ないかとの要望が寄せられた。また、2 年目ということもあり、プログラムに係る経費の一部を自ら主体的に調達することも検討することとした。

4.2. 2018 年度の活動

宮城県の伝統工芸を活かした「製品開発・商品作成」については、宮城県の伝統工芸である「玉虫塗」の製造・販売元である東北工芸製作所を視察し、協力を得ることが可能となったことから、2 グループでデザインを作成し、それを版下として「手鏡」と「しおり」を作成することとした。

また、自らの資金調達活動については、宮城学院女子大学の「さなぎプロジェクト」に応募し採択されて、版下の作成まで資金の提供を受けることとなった。宮城学院女子大学では学生の自主活動を支援するため、リエゾン・アクション・センター（以下「MG-LAC」）¹²⁾を設置している。その中で、プロジェクト型自主活動を、「授業や部活以外での、学生たちが主体的に取り組む社会的・創造的な活動」として、MG-LAC では、「学生によるプロジェクトであれば、ボランティア、地域貢献活動、文化的な活動など、どのような目的・実施内容であっても、『失敗してもいいから、とにかくやってみよう！』という考えのもと支援」している。その中の一つに、「さなぎプロジェクト」がある。「さなぎプロジェクト」は、「学生が全面的に企画・運営する活動であり、教職員は後方支援者として関わる。活動内容、期間、人数などは、学生の意欲と自主性にまかせて特に制限を設けず、活動の効率性や結果（成否）も問わない」プロジェクト型自主活動であって、活動資金助成を行っており「学生たちは、年度初めに大学が行う公募に申請し、承認されることで、競争的資金を獲得し、活動の幅を広げる」ことができる。

4.3. 2018 年度の活動の課題

デザインを行うツールとして、Adobe 社のイラスト・グラフィックデザインソフトである「Illustrator」を活用することとした。講師を招聘し、基本的な操作を学んだ後、自分たち自身で習

11) 工業所有権情報・研修館、「平成 29（2017）年度パテントコンテスト開催のお知らせ」

2017 年 9 月 25 日閲覧。http://www.inpit.go.jp/jinzai/contest/patent/29_patent_contest.html

12) 宮城学院女子大学「プロジェクト型自主活動」。2018 年 9 月 18 日最終閲覧。

http://www.mgu.ac.jp/main/campus/lac/project_type/index.html

熟しながら、版下のデザインを行った。2 グループともに、「Illustrator」で版下を作成し、東北工芸製作所に提示したところ、「線が細くて、かすれてしまう」、あるいは、「きちんと、線と線が交わっていない」など技能不足が指摘された。東北工芸製作所に修正を依頼したところ、専門家が行うため高額な費用が発生すると回答を得て、担当教員がサポートして解決を図った。

5. 女性起業家は輩出できるか

5.1 2017 年度の取り組み

2017 年度の取り組みでは、「女性が社会で働くための環境は、ある程度整ってきた」とした上で、「仙台市では、女性起業家輩出の機運が醸成されつつあり、女子大学で行う女性起業家輩出のプログラムには、一定の理解と支援が受けられる可能性も高くなっている」と指摘した。また、その促進要因として、「アイデアをアイデアノートや事業計画書に落とし込むことについてグループごとに主体的に取り組んでおり、試作を行うなどの積極性も見せている」ことを挙げている。その阻害要因としては、「会社の基本的な仕組みを事前に理解させておく必要」について論じている。結果として、「高等教育機関ではこうした創業を超えた、都市生活をより豊かにする、あるいは、より便利にする生活に密着したサービス型の産業の創出を目指し、より発展性の高い女性起業家輩出のプログラムが求められている」と結論づけている。

5.2 2018 年度の取り組み

2018 年度の「女性起業家輩出のプログラム」では促進要因に留意しつつ、阻害要因をできるだけ排除するように設計を考慮した。まず、2 年目となる「宮城県の伝統工芸」を題材とした 2 チームは、3 年生ということで、ビジネスに関する座学科目を多く履修しており、一定の知識を習熟していることが垣間見られる。初年度の「宮城学院のノベルティグッズ」を題材とした 2 チームには、多くの職業専門家を招聘するのではなく、担当教員がビジネスの初歩的なことを教授して、その習熟度に合わせた指導を行うように改善している。

5.3. 実践の効用

たとえば、自転車はいくら理論を知っていても、乗ってみなければ自在に操ることは出来ない。また、水泳もいくら理論を知っていても、泳いでみなければ水の中で自由に動きまわることは出来ない。ビジネスも同じようなことが言えるのではないだろうか。経営学、あるいは、経済学の理論をいくら知っていても、実際にビジネスを行ってみなければ、成功するかどうかかわからない。ここで行っている「女性起業家輩出のプログラム」は、いわば「Learning by doing」¹³⁾を実践しているものである。

ここでの重要な学びは、うまく行かない、あるいは、失敗に対する学びである。現実のビジネスでは、ほとんど、失敗は許されないものであり、場合によっては、企業の存続に係わってしまうことになる。2017 年度に実施された本プログラムでは、「ブックカバー」と「タンブラー」を開発し、販売したが、頭の中で考えたようには売れなかった。すなわち、事業計画書どおりとは行かなかった。このことは、費やされた努力と達成された成果に乖離があることを学んだと示しているのである。

参考文献

- [1] 渡部順一・薄葉祐子, 女性起業家輩出のプログラム～宮城学院女子大学の取り組み～, 研究・イノベーション学会第 32 回年次学術大会講演要旨集, pp.839-842 (2017)。
- [2] James L. Adams, Good Products, Bad Products, McGraw-Hill Companies (2012) (石原薫訳, よい製品とは何か, ダイヤモンド社 (2013))。
- [3] Tom Kelly with Jonathan Littman, The Art of Innovation, Doubleday(2001) (鈴木主税, 秀岡尚子訳, 発想する会社, 早川書房 (2002))
- [4] 松田修一, ベンチャー企業<第 4 版>, 日経文庫 (2014)。
- [5] 松田修一, 大江健編, シリーズ・ベンチャー企業経営 1「起業家の輩出, 日本経済新聞社 (1996)。
- [6] William D. Bygrave, The Portable MBA in Entrepreneurship, John Wiley & Sons (1994) (千本倅生訳, MBA・起業家育成, 学習研究社 (1996))
- [7] 野城智也, イノベーション・マネジメント, 東京大学出版会 (2016)。

¹³⁾ トヨタ自動車による「カイゼン、Kaizen」が有名である。